信仰と安心

高一　辻　能學

安心と云ふ熟語は御遺文では國家論に主として拜せらるゝ樣に思はれる、天台では止觀の十乘觀法の中の善巧安心止觀と云ふが安心の熟語の出所である。安は安住安樂安平安置安穩と云ふ風に熟字する又靜也止也平也綏也置也等の訓が附せられてある。心が安住すべき處に安置され止まれば安樂である又安泰であり平安である雀は竹に止まり鶯は梅が枝に止まり鶴は松上に止まり龜は岩上に止まり動物植物天地間一切の物は皆其止まる處が有るのである。其止まるべき適當の處を得れば極めて安心なものである他から眺めても何となく程のよいものであるが雀が波の上に居たり鶯が松の木に止まり龜が梅の樹に止つて居たならば自分も不安であらう他から此を眺むるも如何にも落付が惡い。故に精神的安樂安泰を計るには未づ第一に心の安住すべき所へ安住せねばならぬ、即ち心の止まるべき處を見つけねばならぬ。然し乍ら全体安心と云ふものは不安心に對して起つた名目であるから安心を得るには第一に不安心なるものを研究する必要がある。されば人生に於ける最も不安心なものは何があらう、衣食住の缺乏、家庭の不和、生老病死の四苦等であらう。誠に日常精神界の不安と云ふものは何人と雖も其分々に隨て皆あるものである、然し能く考て見ると精神界の不安といふものは實際は衣食住や金錢問題或は家庭等の事に依りて關係するものではない結局は我身があるからの事で我が此の自己といふものさえ無かつたならば一切の不安は忽然として消滅するのである一切の不安は起らぬであらう、故に一切の不安の集注結晶し又源泉となり一切の不安を產み出す母あるものは實に此の自己一身である、此自己一身の最終は要するに死の一字である、扨て此死の一字の解決に是非共關聯して逸すべからざるのは即ち死に行く先の落付塲所である。換言すれば死後生るべき世界國土である。不安のかたまりの

一身を包めるものは生死と云ふ袋である、實に吾等不安の結晶体たる一身は生死と云ふ袋の中に包まれて居るのである而して此袋より脱却して落行く先は如何なる國土であらうか。晩秋の山里の柿の樹の末に一つ二つ殘された薄絹の手毬に眞赤な血を盛りて下げた樣な熟柿が今にもぽとり落ちたならば如何あるであらうと案ずる樣に我等の一身を包める生死の袋の破れた時は此の一身は何處へたどり行くべきぞと案じて見れば臨終正念も出來樣とも思へぬ。靜夜瞑目して坐ろに惟れば吾等の生は夜が明けて旅立を始めたのである一代の云爲行動は一日の旅行である三十而立とは旅の空の中食であり六十になつて死に近いた時は鳥の塒を求めて歸り山寺の入相の鐘の聞ゆる夕暮である。されど腰には辨當もなく懷中には旅費も乏しい一歩々々に日は暮れかゝる宿るべき旅館の的も、待ち受けて居る者も無つたならば何と心細い事ではあいか。故に吾等人生に於ける最大の不安は第一に此自己一身であり、第二は自已一身の落付くべき國土である。此身と國との二つが畢竟不安の最も大なる最も詮じつめた終點である、此吾等の生死の身心即身成佛と示し吾等の生死する國土を娑婆即寂光と教へて大なる不安に對して大なる安心を與へて下されたのが法華經壽量品の法門であり本尊釈迦の身土常住の一段である。故に吾等法華經の行者は我が生死する身の上の大な不安心を即身成佛と云ふ所に安住せしめ我が生死する國土の案じを娑婆即寂光といふ處に安住せしめあらば不安の心は安樂にあり安穩にならねばあらぬ其娑婆即寂光即身成佛と云ふ事が釋尊久遠のた悟りで其悟りが即妙法蓮華經の五字である此妙法蓮華經を悟られた佛の御本体が即ち御本尊であるから、娑婆即寂光即身成佛は妙法蓮華經の內容であり其妙法蓮華經と悟られた御本体が十界の曼荼羅であるとして見れば娑婆即寂光即身成佛と云事と妙法五字と十界の曼荼羅とを論じつめて見れば一つであるであるから、吾々は不安なる心を御本尊と御題目に安住し安置して動かぬ樣にあればよいのである

動かぬ樣にするには信仰の力を以て此不安なる心を御本尊とた題目の上に結び付けるのである吾等の不安心なる心は恰も吉野紙が風に吹かれて居る樣なものである、其を信仰信心と云ふ糊を以て御本尊と御題目との大磐石に確かと張り付けねばならぬ。信心の糊の強い程不安の吉野紙は愈々御本尊と御題目との磐石から離れない。釋尊が五百塵點の昔成佛なされる前は矢張り吾々と同じ樣に此身は何たる不安の者であらう此世界は何たる不安のものであらう不安を離れたる身を求めたい不安を離れた世界へ行きたいと常に煩悶に夜を明したのであるが種々御思案の結果豁然大悟されたのが『萬物は皆妙法である』と云ふた悟りであつた。此時に能居の身体も妙法と照され、所居の國土も妙法と映じた。其能居の身体が妙法と照されたのが即身成佛と云ふ御安心であり、國土即ち世界が妙法であると映じたのが娑婆即寂光と云ふ御安心である。故に吾等の大なる不安も身と土との二つであり、釋尊の五百塵點以前の大なる不安も亦身と土との二つであつた。而して其身と土との二つに對する即身成佛娑婆即寂光と云ふ大安心も亦久遠本佛の大安心を其儘承繼いで居るのであるから此安心を得る迄では凡夫なれども此大安心を得たならば釋尊は五百塵點の昔に此大安心得られ吾等は今日に之を得たので時代こそ異て居るけれども得た所の安心に於ては等しく久遠本佛の大安心である。三千年已前天竺靈山の會上にして壽量品を聞て成佛した人達も、矢張り此本佛の大安心を得て成佛し、六百年前の宗祖大聖人も此大安心に住して龍口も佐渡をも寂光の本土と御決心なされ、御身を即身是佛と覺悟されて一代の迫害の中に泰然自若として大不安の中に大安心を以て法悦の生涯を送られたのである。故に本佛の安心と靈山一會の安心と宗祖の安心と吾等末輩行者の取るべき安心とは一如してゐると云てよいのである。本佛が此娑婆即寂光即身成佛の安心を得られた時が釋尊の成佛開悟であるなれば、吾等も亦此安心を得た時が成佛したのでしる、只釋尊は思惟觀察の智

恵に依り此安心を得給ひ、其他一切の者は皆聞て信じて此安心を得たのである。故に信心の決定せぬ者は安心は得られない。自分は常に安心とは信心決定あり信仰の決定は安心決定なり安心決定は成佛ありと確信して居る。六即の内で第六の究竟即と云ふも畢竟信仰が決つて動かぬやうになつたのが究竟即であるから、自己の信じた御本尊御題目の如くに自己の精神行動が少しも背かぬ樣にあつて敵に向つても尙ほ慈悲を以て對するやうにあつたのが此究竟即である、敵に對して腹が立つ樣では折角御本尊の通りに佛界菩薩界が上に出てゐながら又再び地獄界が上に現はれるやうでは究竟即の信心とは云へぬ。所謂宗祖の『相模守殿こそ善智識よや左衛門こそ提婆達多よ(中略)日蓮が佛にならん第一のかたうどは景信、法師には良觀、道隆、道阿彌陀佛平左衛門尉守殿ましまさずんば爭か法華經の行者とはなるべきと悅ブ』(縮遺一三九九—一四〇〇御振舞御書)と云ふ風に、敵を善智識と思ひ怨に酬ゆるに恩を以てし身を死して社會人類を救濟する迄でに信仰に依つて實行が導かるゝ樣になつたのが眞實究竟即の信仰にして安心決定であり又成佛決定である。

近詠　高三　森　亮遠

ふるさとを　わかこひをれは　あはれにも
ふそねか　はゝかまつむしのこゑ

化他よりは自行を先に

中三　堀内泰鑑

吾人が本化門下の一分子として世を救ひ人を導き行かんと欲せば未づ確固不動の信念の修養なかるべからず。而して如何に卓越せる舌頭三寸を動し最勝甚深の法を說くも實社會に無關係なるものなりせば所謂骨折り損の疲れ儲けとなるのみ。吾國古來よりの宗派、數、數十を數ふと雖も末法濁世の暗夜に赫々たる光明を放ち萬民をして悉く菩提の彼岸に行かしむべき力ある燈臺は果して幾何あ